

毎月11日掲載

第81回ワークショップ @石巻・中央

むすび塾

訓練は飲食店や街づくり団体、石巻市、石巻小の関係者や外国人留学生らが客役を担い、運営スタッフも合わせ50人が参加した。客を誘導する立場で訓練に臨んだ滝川従業員柴田静恵さん(60)は「考えるのと行動するのは違う。言葉に詰まり目が行き届いていないか、もしかしたらあった」と感想を述べ、「安全に誘導する責任と難しさが身に染み」と振り返った。

滝川社長で芽生会会長の阿部司さん(45)は「災害時には互いが助かる方法を探ることが重要。訓練前に従業員全体でアイデアを出し合い、危機に対する意識のレベルを高めたのは収穫だった」と強調した。

2014年に初めて夜の避難訓練を実施した日本料理店「八幡家」おかみの阿部紀代子さん(56)は「客にも協力を求める明確な姿勢が良かった」と指摘し、「参考になった部分を従業員に伝えたい」と話した。

訓練後の語り合いでは、来

客も従業員も安全確保



飲食店の避難誘導

河北新報社は8月22日、通算81回目の防災巡回ワークショップ「むすび塾」を石巻市中央の日本料理店「滝川」で開いた。市内の飲食店をつくる「石巻芽生会」などとともに同店を会場に飲食客を想定した夜の避難訓練を実施。続く語り合いでは市内の料理店経営者ら8人が参加し、訓練を踏まえて従業員の対応などを検証。東日本大震災の教訓や危機意識を共有し合う必要性などを話し合った。

訓練は飲食店や街づくり団体、石巻市、石巻小の関係者や外国人留学生らが客役を担い、運営スタッフも合わせ50人が参加した。客を誘導する立場で訓練に臨んだ滝川従業員柴田静恵さん(60)は「考えるのと行動するのは違う。言葉に詰まり目が行き届いていないか、もしかしたらあった」と感想を述べ、「安全に誘導する責任と難しさが身に染み」と振り返った。

滝川社長で芽生会会長の阿部司さん(45)は「災害時には互いが助かる方法を探ることが重要。訓練前に従業員全体でアイデアを出し合い、危機に対する意識のレベルを高めたのは収穫だった」と強調した。

飲食店の避難誘導を巡って活発な議論が交わされた語り合いは8月22日夜、石巻市の日本料理店「滝川」

参加して学ぶべき点が多いことが分かった。スタッフと共有を図る」と振り返った。同じく島田直樹さん(40)は「災害への意識がまだまだ甘かったことを痛感した。いろいろな想定をシミュレーションしたい」と危機感を強めていた。助言者を務めた東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔准教授は「滝川側にはお任せ、客役の参加者にはおの役割を与えて訓練を実施するなどの、効果を高める工夫が随所にあった」と評価。「訓練をやりたいたいという店をサポートすることは社会的に大きな意味を持っている」と期待を寄せた。

石巻市の八幡家で2014年に行った初回の夜間訓練に比べて、2回目の今回は地震発生から避難完了までの時間が25分短縮された。佐藤准教授は「これは皆さんの協力があってのことです」と呼び掛けた。避難に不満を訴える客役を「スタッフの命も大切なので協力」と説得したと併せて評価できる。

採点は95点。揺れの最中、従業員が客役をテーブルの下に潜るように誘導したのは良かったが、自分はテーブルの下に入らず身を守る行動を取ってなかったと減点した。

今後、被災地での訓練への参加を全国に募るだけでも社会的意義がある。

■むすび塾に参加して



●危機意識と一緒に 震災時は仕込みで追われており、スタッフに身を寄せてねと声掛けする思いが至らなかった。事前の決め事をおこななければならなかった。訓練を通じて危機へのレベルを一緒にすることができた。それが判断して動き、状況をしっかり伝え合えたと思う。滝川社長・阿部司さん(45)



●誘導の困難実感 訓練は客役の参加者に助けられて速やかに避難誘導できた。実際はこれほどスムーズにはいかないだろう。自分もうまく対応できない部分があった。実際に行動することで従業員全員で避難の大変さ、大切さを実感した。客も従業員も助かるよう備えを進めたい。滝川従業員・柴田静恵さん(60)



●訓練発信したい 震災の不幸を繰り返さないためには、訓練の積み重ねによる個々の防災意識の向上が何よりも大切な時間と場所。天候、季節など、取り巻く環境を変え繰り返して実施することで、新たな気づきや学びもあるだろう。地域を超えて広く発信していきたい。八幡家おかみ・阿部紀代子さん(56)



●積極的に訓練を 大震災では防災や避難の常識が通用せず、甚大な被害を受けた。観光客の回復が進む今、被災状況や災害への備えを周知し、風化防止に努める必要がある。地元飲食店が積極的に訓練を進め、成果や心構えを利用客へ発信する意味は大きい。みらいサポート石巻専務理事・中川政治さん(42)



●従業員も命大切 震災で店の壁が崩れた。津波を意識せず、従業員をどめて片付けをしたのを悔やむ。災害時、客はもちろんだが、従業員の命も大切だ。家族の安全も気掛かりだろう。客の誘導は適切な境界が分らず怖い。従業員を帰す努力も必要ではないか。大もり屋本店社長・大森信治郎さん(63)



●経験生かし提案 震災時に従業員の安全確認ができず混乱した経験から、連絡網を整備した。防災は失敗を繰り返さないという強い意志で訓練し話し合いを繰り返すことが必要だ。被災したわれわれがノウハウを積み上げて、他地域に提案するのをも一つの手段。街なか創生協議会幹事長・尾形和昭さん(58)



●命守る使命感 震災のときは石巻市の渡波地区にいたが、津波が来る前に運よく避難できた。店は家族と親族でやっており、災害対応は考えていなかった。甘えがあった。滝川が誘導方法を決めていたのを知り、すごいと感じた。お客の命を守らないといけない。居酒屋「鳴海」店主・小松洋生さん(56)



●話し合いが必要 訓練に臨むスタッフの緊張感が伝わってきた。激しい被害を受けた石巻だからこそかもしれないが、仙台でやった場合、これほど真剣に協力が得られるかは自信がない。(避難誘導、家族の安全確認などの間で)板挟みになる従業員の対応は、みんな考えてほしい。大観楼社長・遠藤慎一さん(51)



旧北上川の右岸に広がる石巻市中心部の市街地は震災当時、高さ2層を超える津波に襲われた。滝川など商店や飲食店が集中する中央、立町地区は大半の店舗が被災。逃げ遅れて犠牲になった住民もいた。

2層の津波 市街地襲う 商店など大半被災



津波は旧北上川を逆流し、中心対岸にある面地区は瞬く間に押し寄せた。黒い水が土手乗り越え、足元に来たかと思ったらすぐに胸の高さになった。「店の品物をうず高く上げていたらガラスが突き破られ水が天井近くまで上がった。面地区で被災した住民の当時の証言は、想定外の事態への恐怖に満ちている。

中瀬と中心部をつなぐ内海橋は午後2時40分の地震発生後、避難などで移動する車で渋滞した。津波は約1時間後に到達し、車もろとも橋を乗り越えた。橋は持ちこたえられなかった。津波が押し寄せた状況から「崩壊」との情報も流れた。

震災前、中心商店街は約200店舗が軒を連ね、立町地区の飲食店は約300店舗を数えた。一帯を覆った津波が押し寄せた瞬間、大破した船舶や大破した自動車から流れ出した油で粉じん被害も発生した。

震災による石巻市の死者・行方不明者は計3976人(7月現在、関連死者を含む)。全壊した建物は約3万3100棟に上った。

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。次回のむすび塾は27日、富谷市で開きます。